市川の国指定史跡

北国分駅
史跡・堀之内貝塚
市川歴史博物館
市川考古博物館
道の駅
いちかわ
史跡・曽谷貝塚
史跡・下総国分尼寺跡
下総総社跡
史跡・下総国分寺跡附北下瓦窯跡
須和田遺跡
国府台駅
市川真間駅
市川駅
菅野駅
京成八幡駅
本八幡駅

市川の国指定史跡5

市川市は、昔から、豊かな自然に恵まれ、住みやすい環境にありました。それは紀元前23,000年から人びとが暮らし、さまざま時代を経て、現在に至っていることからもわかります。このような悠久の歴史の記憶として、市内では数多くの遺跡が発見され、なかでも、5つの国指定の史跡は特筆すべき存在です。

縄文時代の市川市域は、貝塚の分布密度が極めて高く、日本有数の貝塚密集地域であり、存在が確認されている貝塚は55を数えます。姥山貝塚、曽谷貝塚、堀之内貝塚は、市川市を代表する馬蹄形貝塚であることに加え、遺構や研究の成果が日本考古学の発展に大きな足跡を残しました。

市川市は、利根川の下流であった江戸川と東京湾を結ぶ水上交通に、東京湾岸の陸上交通が交わる関東地方有数の要衝でした。

そのため、江戸川と東京湾を望む国府台には、飛鳥時代から奈良時代にかけて、下総国のまつりごとを行う国庁が置かれ、その東の国分台には国分（僧）寺と尼寺は国史跡に指定され、古代国家の力を今に伝える遺跡となっています。

▲姥山貝塚

▲下総国分尼寺跡

▲曽谷貝塚

▲下総国分寺跡附北下瓦窯跡

▲堀之内貝塚

表紙土器写真撮影：小川忠博

旧石器(先土器)時代　紀元前23000年～11000年

23000年　市川で最古の遺跡（国府台6丁目新山遺跡）が出現する。

縄文時代　紀元前11000～500年

7500年　市川最古の縄文土器が使われる。

5000年　この頃、市川最古の貝塚がつくられる。

4000年　海進がピークを迎え、前後して市内各所に貝塚がつくられる。

3000年　この頃、市川砂州の形成が始まる。

2800～500年　姥山・曽谷・堀之内などの馬蹄形貝塚がつくられる。

弥生・古墳時代　紀元前500～紀元600年

500年頃　市川でコメ作りがはじまる。

紀元500年代　国府台・市川砂州に古墳群がつくられる。

飛鳥・奈良・平安時代　600年ごろ～1185年

600年代末　下総国府がつくられる。

710～30年代　山部赤人や高橋虫麻呂が手児奈の歌を詠む。

741年　国分寺建立の命令がだされる。

900～1000年代　下総国分寺・尼寺の規模が縮小する。

姥山貝塚（うばやまかいづか）

完全な形の竪穴建物跡（たてあなたてものあと）を初めて発掘

立地・年代・規模　姥山貝塚は、標高約22～24ｍの台地上にある縄文時代中・後期（紀元前約２８００～１０００年）の集落跡です。貝塚の貝層は、アルファベットの「C」の字形に分布しており、大きさは外径で東西約１３０ｍ、南北約１２０ｍです。貝層を構成する貝類は、海水産のハマグリが主体を占めていますが、市内の貝塚でよく見かけるイボキサゴがほとんど含まれていません。

竪穴建物跡と縄文人骨　これまでの発掘で竪穴建物跡が30軒以上、人骨が１４０体以上発見されています。人骨は、縄文人の平均身長や平均余命を知る上で大きく貢献しました。また、１９２６年のＡ地点の発掘で日本で初めて完全な姿の竪穴建物跡（住居跡）が発見されたことから、全国的に知られるようになりました。この発掘では、建物跡の床面から成人の男性２人、女性２人、子ども１人の計５体の人骨が発見され、その死因や相互の関係をめぐって議論が巻き起こりました。

日本初の炭素年代測定　放射性炭素による年代測定が行われたのも、日本では本貝塚が初めてになります。１９４８年にＤ地点から出土した炭化材の年代測定を依頼したところ、約４５００年前という年代が出ました。この測定年代は、当時の考古学界に衝撃を与え、縄文時代の年代観をめぐる議論を巻き起こしました。

日本初の遺跡の航空写真　遺跡を上空から撮影する試みも、日本では本貝塚が初めてになります。１９２６年に下志津陸軍飛行学校が撮影した航空写真を見ると、台地上の広大な面積の畑に真っ白な貝殻が、環状に分布する様子（写真右上）がよくわかります。

●代表的な出土遺物

▲Ｃ地点出土の縄文土器

▲姥山貝塚と指定範囲

▲初めて撮影された航空写真（1926年）
写真所蔵：東京大学総合研究博物館

▲完全な形で発掘された竪穴建物跡（1926年）
写真所蔵：東京大学総合研究博物館

▲５体の人骨が発見された竪穴建物跡（1926年）
写真所蔵：東京大学総合研究博物館

姥山貝塚

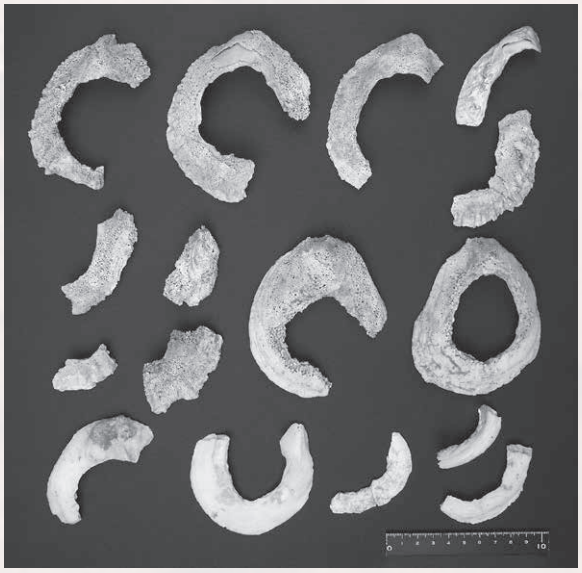
所在地	柏井町1-1212 ほか　　指定年月日　S42.8.17
指定面積	22,772.81㎡
アクセス	JR武蔵野線船橋法典駅からバス「姥山貝塚公園」下車 徒歩5分、武蔵野線船橋法典駅から徒歩15分
見　学	姥山貝塚公園として一般開放

曽谷貝塚

日本最大級の馬蹄形貝塚

立地・年代・規模　曽谷貝塚は、標高約20～25ｍの台地上にある縄文時代後期（紀元前約２０００～１０００年）の集落跡です。貝塚の貝層は、アルファベットの「U」の字形に分布しており、大きさは外径で東西約２１０ｍ、南北約２４０ｍです。中央がくぼ地となる単独の馬蹄形貝塚としては、日本最大の規模になります。

曽谷式土器　本貝塚は、縄文時代後期の曽谷式土器の基準になった遺跡としても知られています。１９３６年に考古学者の山内清男氏が本貝塚を発掘した際、出土した土器の形と文様が、それまでに知られていた縄文土器とは異なることから曽谷式土器と命名し、年代を示す単位にしました。



▲イタボガキ製の貝輪未製品

イタボガキの貝輪　Ｄ地点の小竪穴から、イタボガキの貝殻と貝輪の未製品が多数出土しました。イタボガキの貝輪生産に関わる資料は、全国的にも乏しいことから、縄文時代の貝輪生産を考える上で注目されます。

糞石　本貝塚は、糞石がまとまって出土することから、糞石の研究史にも足跡を残しています。糞石から、落とし主である人間あるいは犬の栄養状態、健康状態、遺跡周辺の環境などが復元できるかもしれません。

漁撈具と狩猟具　漁撈具では、棒の先に付けて魚を突き刺すためのヤス状刺突具が多く出土しています。内湾から河口にかけての広い範囲で、漁撈活動を行っていました。狩猟具では、黒曜石やチャート製の石鏃が出土していますが、チャート製の方がやや多い傾向にありました。

●代表的な出土遺物

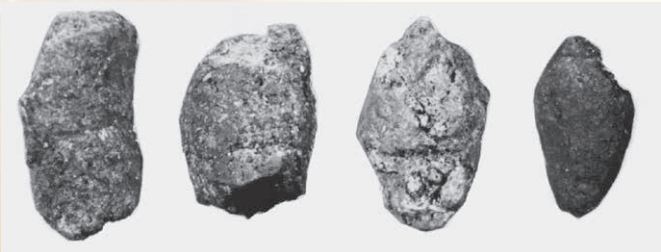
▲Ｄ・Ｅ地点出土の縄文土器（中央は曽谷式）

▲Ｅ地点の発掘風景

▲曽谷貝塚と指定範囲

曽谷貝塚

所在地	曽谷2-15 ほか
指定年月日	S54.12.22　H21.7.23追加指定　H28.3.1追加指定
指定面積	50,216.87㎡
アクセス	JR総武線本八幡駅からバス「曽谷」下車徒歩10分
見学	自由



▲Ｅ地点出土の糞石

堀之内式土器の標式遺跡

●代表的な出土遺物

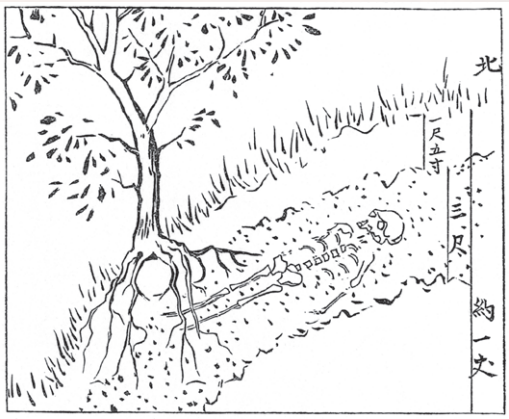
▲堀之内式土器の基準になった土器（個人蔵）
画像提供：東京国立博物館
Image:TNM Image Archives

堀之内貝塚

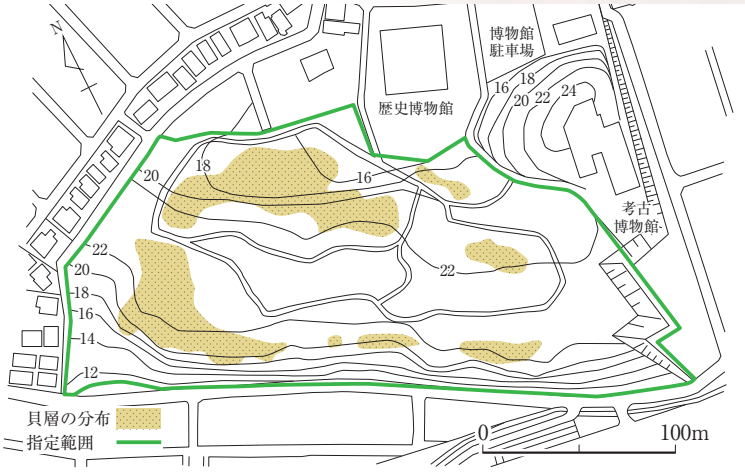
立地・年代・規模　堀之内貝塚は、標高約22～23mにある縄文時代後・晩期（紀元前約2000～500年）の集落跡です。貝塚の貝層は、アルファベットの「U」の字形に分布しており、大きさは外径で東西約225m、南北約120mです。中央の細長い広場の標高が最も高く、標高約10～20mの台地斜面を中心に貝層が分布しています。

竪穴建物跡と縄文人骨　1904年、東京人類学会が本貝塚を発掘したことから、全国的に名前が知られるようになりました。発掘の翌日、日本で初めて全身骨格が揃った埋葬人骨が発見されました。これまでの発掘で竪穴建物跡6軒、人骨13体が発見されています。竪穴建物跡は、極端に数が少なく、貝層下の発掘が不十分と考えられます。

▲コウイカの甲羅　写真所蔵：南山大学人類学博物館



▲全身骨格が揃った埋葬人骨（1904年）
（「貝塚叢話」『考古界』8－5より）



▲堀之内貝塚と指定範囲

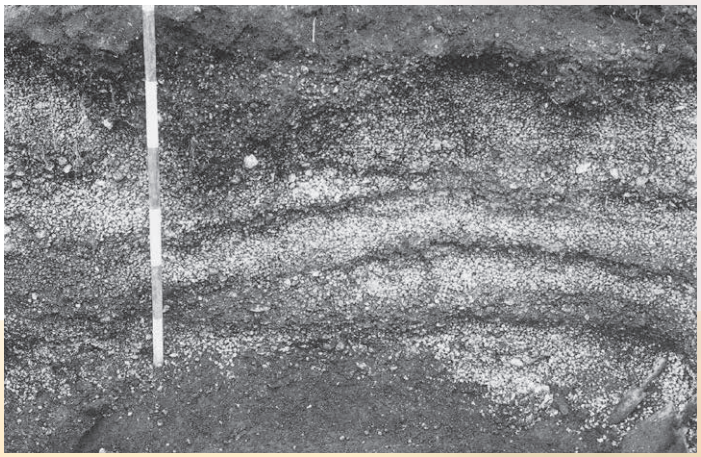
堀之内貝塚

所在地	堀之内2-15
指定年月日	S39.7.6　S42.6.22追加指定　S47.2.3追加指定
指定面積	26,789.85㎡
アクセス	JR総武線市川駅からバス「博物館入口」下車徒歩10分、北総線北国分駅から徒歩10分
駐車場	有（歴史博物館横）
見学	堀之内貝塚公園として一般開放

堀之内式土器　本貝塚は、縄文時代後期の堀之内式土器の基準になった遺跡としてよく知られ、堀之内式土器は、関東地方を中心として、隣接地域にも分布しています。

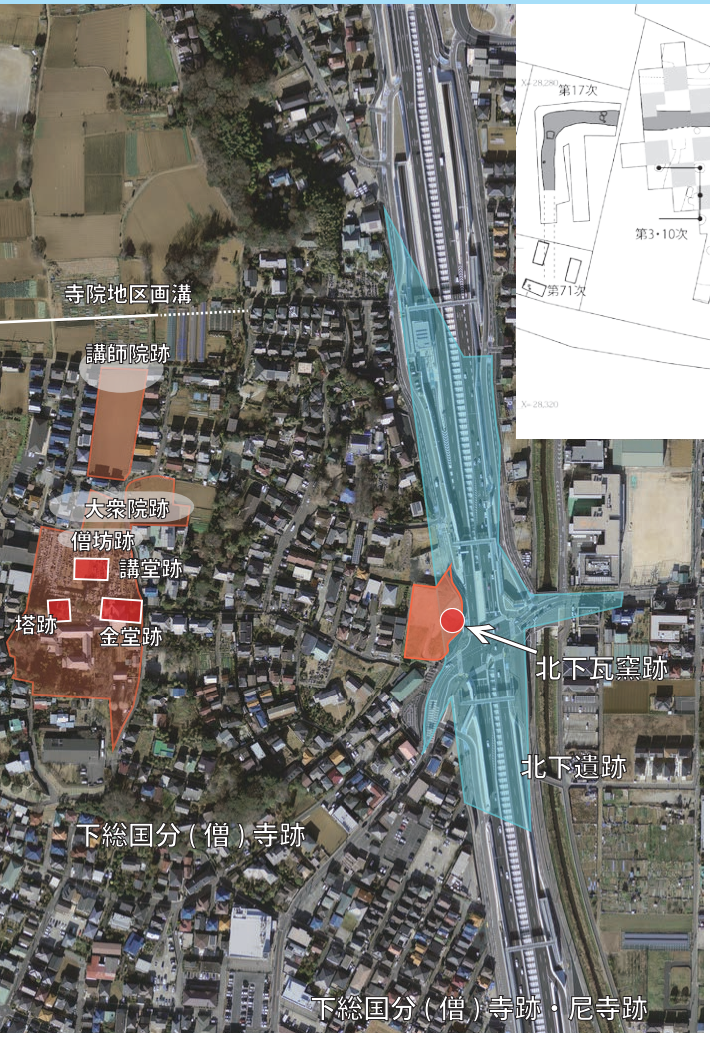
貝塚の貝類とイカ　貝塚を構成する貝類は、後期前半はハマグリとイボキサゴが主体を占めていますが、晩期になるとハマグリとオキシジミが主体を占めるようになり、海退による環境の変化を物語っています。注目されるのは、コウイカやコブイカなどのイカが数多く出土していることです。春から初夏にかけて、産卵のために浅瀬の藻場に近寄ったイカをとっていました。

道免き谷津遺跡との関係　東京外郭環状道路の建設に伴い、本貝塚の南側にある道免き谷津遺跡が発掘され、台地直下の低地から木組遺構と大量のトチの実が発見されました。この木組遺構は、堀之内貝塚の縄文人たちがトチの実のアク抜きや加工をするための施設と考えられます。

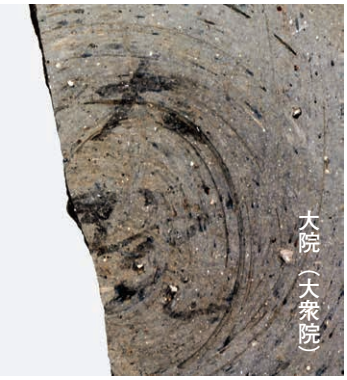


▲イボキサゴの貝層　写真所蔵：明治大学博物館

下総国分寺跡附北下瓦窯跡



▲国分寺僧坊・大衆院跡



▲僧寺や大衆院を示す墨書土器

▲北下瓦窯跡　写真所蔵：千葉県教育委員会

▲屋根の軒先に葺かれた宝相華文の瓦
この文様の瓦は、諸国の国分寺でもめずらしい

▲瓦工人の名前が記された瓦

国家プロジェクトにより建立

国分寺の建立　古代の国家は、仏教によって国家の無事を祈りました。735年、737年におきた天然痘や飢きんに対して聖武天皇は、741年に国ごとに僧寺と尼寺からなる国分寺建立の命令を出しました。下総国分寺は、市川市の国分台の南端に、僧寺と尼寺が東西に並んで建立されました。僧寺を東寺と記した墨書土器も出土しています。なお、国の史跡では僧寺のことを国分寺といいます。6頁のタイトルは史跡の名称です。

発掘で確認された施設　下総国分僧寺・尼寺の発掘は、1932年に始まります。その発掘で寺の位置がわかり、1966～7年の発掘で、僧寺では金堂（本尊を安置した建物）・講堂（僧が経を学んだ建物）・七重塔（高さは約60m）の跡、尼寺では金堂と講堂の跡を確認しました。尼寺に塔は建立されません。僧寺の堂と塔の配置が奈良県の法隆寺に似るので、法隆寺式の配置といわれますが、法隆寺とは無関係です。

その後、僧寺では寺院地（寺の敷地）が溝で区画され、その範囲は、最大で南

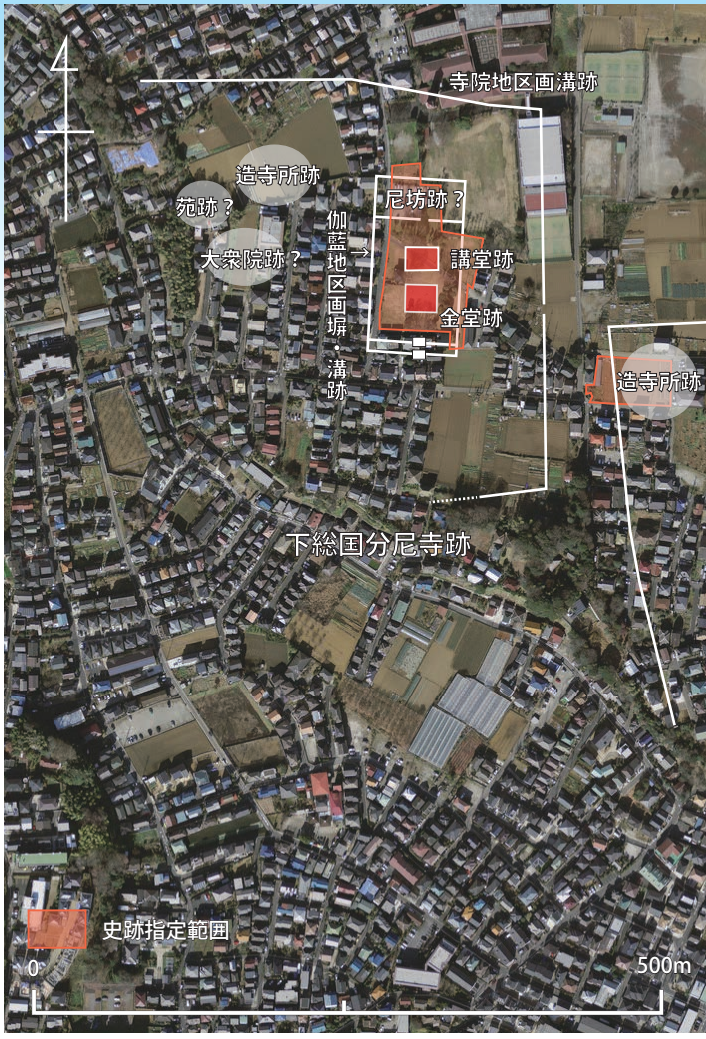
下総国分寺跡附北下瓦窯跡

所在地	国分3-20-1 ほか
指定年月日	S42.12.27　H14.9.20追加指定　H22.8.5追加指定
指定面積	21,336.85㎡
アクセス	JR総武線市川駅からバス「国分」下車徒歩5分
駐車場	参拝者用駐車場有
見学	自由

下総国分尼寺跡

下総国分尼寺跡

所在地	国分4-17-1 ほか
指定年月日	S42.12.27　H元.3.29追加指定 H14.9.20追加指定
指定面積	6,615.49㎡
アクセス	JR総武線市川駅からバス「国分」下車徒歩10分
見学	国分尼寺跡公園として一般開放



▲伽藍地区画東辺塀・溝跡

▲伽藍地区画東辺溝

▲尼寺を示す墨書土器

▲寺院地東辺溝から出土した二彩陶器小壺

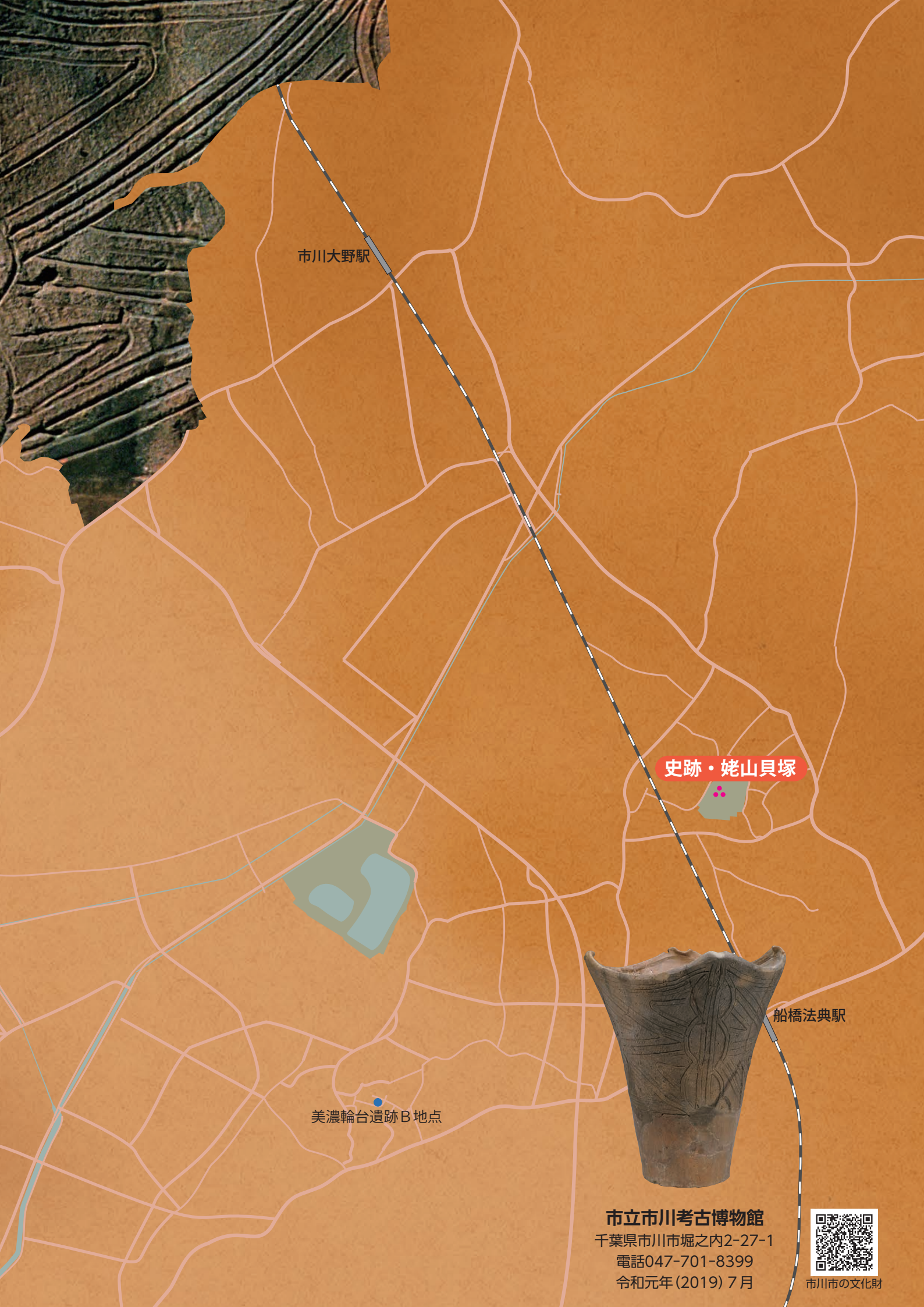
▲僧？尼？の人面と苑を示す墨書土器

北約340m、東西約330m、僧坊（僧の住まい）、大衆院（寺の事務所）、講師院（講師と呼ばれた高位の僧が住んだ施設）、造寺所（建立や補修の中心となった施設）などを確認しました。尼寺では、寺院地が最大で南北約340m、東西約430m、伽藍地（金・講堂・尼坊など中心施設の場所）を区画した塀や溝を確認し、尼坊・大衆院・苑（菜園もしくは花園）を想定しています。

東京外郭環状道路建設にともなう2002～16年の発掘では、僧寺の東側で北下遺跡を確認しました。北下遺跡の台地とその斜面では、国分寺の創建や補修に用いられた屋根瓦や梵鐘などを生産していました。創建期の瓦窯を二基確認し、北下瓦窯と名づけられました。北下瓦窯で焼かれた瓦は、国庁（国府の中心となる施設）にも供給されました。

建立の背景　国分寺創建の時に国庁に瓦が葺かれるのは、他の多くの国でも認められます。また、その時期の都では平城宮が一新し、東大寺の造営が始まります。そのような時期に建立された国分寺には、国家の無事を祈るだけでなく、国家の威信を諸国に示す意図があったとみるべきでしょう。国家は、都と地方を問わず、新たな建物で威信を示そうとしたのです。60mの高さを誇った僧寺の七重塔は、そのシンボルでもありました。

国分寺造営は、国家の威信をかけた一大プロジェクトだったのです。



市立市川考古博物館
千葉県市川市堀之内2-27-1
電話047-701-8399
令和元年（2019）７月

市川市の文化財